

企画展 はやしきょちか

「明治の名所絵師 小林清親展」

小林清親(1847~1915)は弘化4年(1847)御蔵屋敷の旗本の家に 生まれ、文久2年に家督を継ぎ順風満帆の暮らしをしていましたが、幕末の 動乱に巻き込まれ、全てを失います。明治政府が樹立すると西洋から様々な 文明、文化が流入します。清親はいままでの暮らしが大きく変わる光景を目 の当たりにします。鉄道、馬車、ガス灯、写真や西洋式の生活習慣など文明 開化と呼ばれる近代化の時期に入り、江戸の景色が徐々に失われてゆきまし た。清親は浮世絵師として再出発し、文明開化を代表するレンガ造りの建物 や機関車、蒸気船や消えゆく江戸の面影の風俗、風習などをテーマとした作 品を発表し瞬く間に人気絵師の仲間入りをします。



「東京橋場渡黄昏景」 制作:明治9年版元:松本平吉

承和2年(835)太政官符に記録されている 隅田川の渡しの中で最も古い渡しで、京と武蔵国 と常陸国府を結んでいました。江戸時代は近くに あった白鬚神社からとった白鬚の渡しの名前が一 般化しました。この作品は清親の初期の作品で明 治9年に「光線画」と銘打って刊行した中のひ とつです。図は隅田川を東岸から西岸に向かう渡 舟で、乗っているのは女性2名、男性2名と櫓を 漕ぐ舟頭です。夕日を浴びて対岸の森や川面を行 く渡舟の舟頭の着物や顔が燃えるような赤い色彩 に輝いています。



「明治十四年一月二六日出火 浜町より両国大火」 制作:明治 14年 版元:福田熊次郎

清親は、火事が大好きだったようです。火事の 声を聞くと着の身着のままでスケッチ帳を片手に 外に出て行き火災の現場をスケッチしていまし た。図は、明治時代最大の火災通称「神田松枝町 大火」といい、日本橋、神田で燃え上がる炎が隅 田川を越えて対岸の本所、深川に燃え広がる場面 を描いています。この火災が鎮火し、清親が自宅 に戻った時には自分の家も焼失し、生活道具の他 スケッチ類や絵具なども失ってしまったそうで

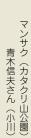
那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 市川 信也

2月初旬にミニギャラリー に届いた作品をご紹介しま

連凧に書いてある文字は 「わが里は良い水、良い米、 良い温泉とカタクリ、水芭蕉 の群生がある那珂川町」だそ うです。

たこ作り、たこあげを希望 する方は薄井さんまで。

☎ 0287 − 96 − 3133







凧 薄井昭二さん